岐阜県岐阜市教育委員会

ありのままの君を受け入れる新たな形

～不登校特例校　岐阜市立草潤中学校の挑戦～

はじめに

2020 年度、全国の小中学校の不登校児童生徒は、196,127 人で前年度よりも 14,855 人増加したと文部科学省が発表した。不登校児童生徒への対応は、全国的に大きな課題となっているのが現状である。

2016 年度末に「教育機会確保法」が施行された当時、すでに本市においては、不登校児童生徒の割合が、県平均・全国平均より高く、特に中学校において顕著に表れていた。

そこで、2018 年度には、旧徹明小学校の跡地活用を視野に入れ、他市の特例校を視察しながら、不登校特例校の基本方針案を作成し、開校に向けた具体的な準備を始めた。2019 年度には、基本方針を決定し、文部科学省より「教育課程特例校」の指定を受けた。

そして、2020 年度には、教育委員会内に不登校特例校設置準備室を設け、環境整備に取りかかるとともに、大学教授、小児科医師、先進校等から様々なご示唆をいただいた。さらに、学校説明会や個別面談等を実施し、転入学生徒 40 名（1年生:13 名、2年生:12 名、3年生:15 名）を決定した。

こうして 2021 年4月、東海地方初の公立不登校特例校「岐阜市立草潤中学校」が開校した。草潤中学校の校名は、中国の戦国時代の儒学者「荀子」の言葉「内に素晴らしいものがあれば、いつかは外にあらわれる」という意味から、「草潤」と名付けられている。

本稿では、草潤中学校の概要、実践の歩み、そして今後の方向について述べる。

1.　草潤中学校のコンセプト

草潤中学校のコンセプトは、「学校らしくない学校」である。これまでは、生徒が学校のシステムに合わせてきた。毎日決められた時間に登校し、決められた教室の決められた座席に座り、決められた教科の学習をみんなと一斉に受けることが生徒にとって当たり前となっていた。こうした学校の仕組みは、多数の生徒を効率的に指導するためには有効な仕組みにちがいない。

しかし、そういった学校らしい仕組みに順応できずに苦しみ、不登校になっている生徒がいることも事実である。草潤中学校は、学校が一人ひとりの生徒に合わせることを目指し、「ありのままの君を受け入れる新たな形」というキャッチフレーズを掲げている。

2.　草潤中学校の教育方針

草潤中学校は、一人ひとりの「心身の安定」と「自分の新たなよさと可能性を発見できる」ことを大切にし、「自分らしい新たなライフプランを描くことができる」学びの場を提供できるようにしている。

そのための柱としている４つのキーワードについて以下に述べる。

⑴　心身の安定・自立のための学び

1つ目のキーワードは、「心身の安定・自立のための学び」である。草潤中学校では、様々なタイプの生徒に合った安心していられる居場所を各所に配置し、ありのままの自分で

いられる環境をつくっている（写真 1、2）。

［写真1］　仕切りを設けた個別学習ができる「Eラーニングルーム」

［写真2］　軽運動もできる「アクティブルーム」

また、草潤中学校では、「学級担任制」ではなく、生徒一人ひとりが担任を自分で選ぶ「個別担任制」を採っている。今年度は、学校生活を送る中で、自分が最も相談しやすい先生を、5月半ばに生徒自身が決めた。

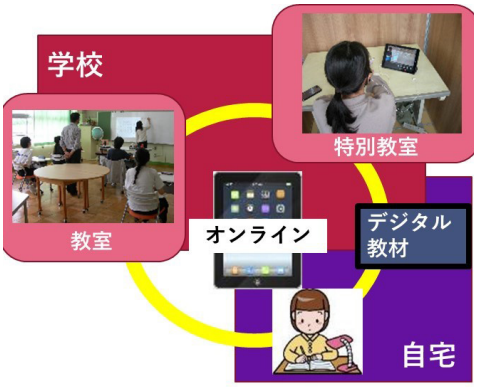
結果的には9名の教員が、2~6名の生徒を担任することになった。

⑵　ICT を活用した個別最適な学び

2つ目のキーワードは、「ICTを活用した個別最適な学び」である。草潤中学校では、「自分が取り組みたい学びを好きな場所で」取り組めるシステムを採っている。そのため、すべての授業をタブレット端末で生配信している。

教室内で授業に参加する生徒だけでなく、オンラインで特別教室や自宅等で授業に参加する生徒もおり、さらに自分の興味・関心や学習状況に合わせて、他の学年の授業に参加することも可能にしている。場所に縛られず、同じ学びを共有することができるようにしている。それでもまだ、授業内容が自分に合っていないと感じるようであれば、デジタル教材を活用した学習を自分で進めることも可能としている。

下図のように ICT の活用により、個別最適な学びを展開することができる。



［図］個別最適な学びの場

⑶　自分の新たなよさを発見する学び

3つ目のキーワードは、「自分の新たなよさを発見する学び」である。草潤中学校では、生徒にいろいろなことにチャレンジしてもらいたいと考えている。そこで、音楽、美術、技術・家庭を1つにまとめた「セルフデザイン」という教科を新しく作り、自分が興味・関心を持ったことに、とことん取り組むことができるようにしている（写真 3）。これにより、生徒の個性を伸ばしつつ、自己肯定感の育成を目指している。

［写真3］セルフデザインの学習で作品を制作する様子

また、校舎の4階を「産学ブース」と名付け、地域の方や大学、民間企業にボランティアで入っていただき、普段接することの少ないプロフェッショナルの技術にも触れることができるように準備を進めている。

⑷　社会との絆を感じる学び

4つ目のキーワードは、「社会との絆を感じる学び」である。大切にしているのは、一人ひとりの個性と同時に、「社会とつながることのよさ」を実感できるようにすることである。

実際に、これまでにJAの職員と畑で野菜を作ったり、地元のオーダーメイド洋品店のオーナーに被服の学習を支援してもらったり、地域の方から琴の演奏を教えてもらったりするなど、様々な人や社会とのつながりを体験できるような学びの場を位置付けている（写真 4）。

［写真4］地域の方から琴の演奏を教えてもらう様子

3. 特別の教育課程の編成

⑴ 生徒個々の状況に合った学びのスタイル

草潤中学校では、家庭学習を基本とするモデル、週に数日登校するモデル、毎日登校するモデルを参考にして、生徒が自分に合った学びのスタイルを選んでいる。1カ月程度のスパンで見直しており、変更も可能としている。

昨年度に行われた転入学希望者を対象とした個別懇談時においては、転入学生徒 40 名のうち、「週数日登校」を考えていた生徒が 52.5%（21 人）であったが、入学後1か月後には、67.5%（27 人）が「毎日登校」することを選択するようになった。また、現在に至るまで、平均して毎日約7割の生徒が登校し、登校していない生徒の約 4 割がオンライン授業に参加している。

このように、昨年度までに在籍していた学校において、別室登校や放課後登校であった生徒、ほぼ全欠であった生徒が、草潤中学校に入学し、新たなライフプランを目指して、前向きに安心して学校生活を送っていることが分かる。

一方、様々な理由で学校を休むことを選択した生徒については、「学校に行かなければならない」という思いにさせないよう、家庭の負担にならない範囲で、担任等が家庭訪問をしたり、生徒が興味・関心を示しそうな学習内容や教材を紹介したりしている。

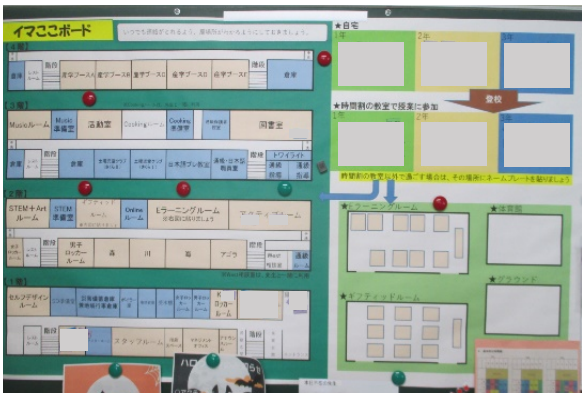
草潤中学校では、登校させることが主目的ではなく、いつでも、どこにいても、一人ひとりに学びを保障することができるような支援を心がけている。

⑵ 1日の学校生活の流れ

草潤中学校は、岐阜市全体を通学区域としており、通学生徒の健康安全に配慮し、一般の中学校より遅い時刻を始業とし、早い時刻を終業としている。通学手段は、徒歩または自転車や公共交通機関を利用している。保護者による送迎も可能である。

まず生徒は、9時 35 分に登校したら、前述の個別担任の先生と「ウォームアップ」に取り組み、1日の学習内容と場所を自分で決めるようにしている。

生徒は毎時間、自分が決めた場所で学習に取り組むため、「イマここボード」（校舎図等が掲載されたボード）に事前に自分のネームプレートを貼るようにしている（写真 5）。巡回当番の先生は、それを見て、実際に生徒一人ひとりの所在を確認できるようにしている。



［写真5］イマここボード

給食はなく、弁当を持参するか、業者の弁当を注文することができる。もちろん弁当を、どこで食べるかも自由である。また、みんなで一斉に取り組む掃除はない。

最後に、個別担任の先生と「クールダウン」に取り組み、1日の自分の学びを振り返ることができるようにしている。そして、14 時 35 分には下校する。後期には、生徒からの要望によって放課後に1時間、学校に残って学習をすることができる「放課後学習」の時間を設定しており、毎日8人程度が参加している。

学校生活全般において、安全や公衆衛生に関わること以外に、強制することはしていない。服装、持ち物などで、細かな規則はない。また、一般の学校にある「運動会」「文化祭」等の既定の学校行事はないが、生徒の願いや思いを受けて、必要な行事等がある場合、生徒と先生で相談して企画・運営している。

⑶ 個に応じた指導と評価

一般の中学校では、1年生から3年生まで、年間 1015 時間の授業を行っているが、草潤中学校では、全学年とも年間 770 時間の授業を行っている（一般の中学校の4分の3）。

学年ごとに基本的な時間割は設定しているが、一人ひとりのニーズに応じて、個別に学習内容を相談し、一人ひとりの可能性を伸ばすことができるようにしている。また、定期テストについては、希望者を除いて一斉に実施することはない。

こうしたことを踏まえ、通知表の様式は、生徒・保護者・学校の三者面談で決定している。「通常の学校のように5段階の評定をしてほしい」「今は学び直しだから通常の評定ではなく、学習状況等を文章で評価にしてほしい」など、全校生徒 40 人に対して 40 通りの通知表を作成している。

4. 転入学生徒以外の不登校支援

草潤中学校が目指す学校の実現に向けて、文部科学省には定員 40 人として申請し、各学年 13 人程度とした。昨年度の学校説明会には、児童生徒 222 人の希望者が参加した。

これほど多くの希望者がいることを踏まえ、教育委員会では、定員 40 人に加え、在籍校に籍を置いたまま支援する新たなシステムを2つ導入した。1つ目は、在籍校に籍を置いたまま週1日登校して 50 分個別の学習相談等をする通級支援コースである。2つ目は、週1～2回オンラインで個別の学習相談等をするオンライン支援コースである。今年度は、希望者の中から通級支援コース 25 人、オンライン支援コース 25 人を支援することになった。

5. 草潤中学校の隠れたコンセプト

草潤中学校には、「学校らしくない学校」というコンセプトとは別に「手作りの学校」という隠れたコンセプトもある。生徒の学びに不可欠な設備・備品は、市の予算での整備に加え、校務員の方によるドア等の塗装、地元の方による敷地内の花壇整備や運搬作業が行われた。

［写真6］「図書室」のテントやクッション等は企業からの寄附

また、草潤中学校への寄附を地域の方だけでなく、全国の方からもいただいている（写真 6）。この温かい気持ちが、生徒にも「応援してくれる人がいることの安心感」として伝わっている。

6. 草潤中学校がもたらす教育的効果

草潤中学校が開校して 9 ヵ月が過ぎた。9月と10月に実施した来年度の転入学希望者を対象とした学校説明会では、草潤中学校の在校生から、次のような声を聞くことができた。

- 「学校が初めて楽しいと思った」
- 「草潤中学校は自由で安心感がある」
- 「気楽に自分の好きな場所で、自分のペースで学習ができる」

これまでの学校のシステムに合わせることに疑問を感じ、不登校を経験した生徒のありのままを受け入れる草潤中学校の実践は始まったばかりである。そのような中でも、個に応じたケアや学習環境の中で、生徒は心身の安定を取り戻しつつ、自分の新たなよさと可能性を着実に見出そうとしている。今後は、草潤中学校での実践で得た実践のノウハウを一般の学校へ普及させることにより、不登校支援の拡大を進めるとともに、個別最適な学びの一層の充実を図る必要がある。

例えば、不登校児童生徒が、教室以外の相談室や自宅等でもオンラインで授業を受けられるようにすることや、不登校だけでなく、全ての児童生徒にとって自由な学びや生活を保障することができるよう、学校のシステムの中に選択的な要素を組み入れることなどが挙げられる。

おわりに

生徒が学校のシステムに合わせるのではなく、学校が一人ひとりの生徒に合わせるという在り方が、不登校の解決だけでなく、学校教育全体を改革する「起爆剤」となるかもしれない。

そう考えると、草潤中学校は、不登校特例校という枠を超えて、生徒のありのままを受け入れつつ、一人ひとりの「未来」をつくり出す学校の 1 つのモデルとなるのではないだろうか。